

---

# フォーマルハウト

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フォーマルハウト

### 【Nコード】

N9604F

### 【作者名】

並盛りライス

### 【あらすじ】

戦争の影が見え隠れする外側の世界。両親のいないキオトとワタルが二人で生きる内側の世界。つましくも穏やかな生活を続ける二人の成長の物語。

## 二人の生活

戦争がはじまった。

この国も、もう安全とは言えないのかもしれない。

前線に行った父さんは帰ってこないし、青い目をした吟遊詩人が母さんを連れ去ってしまってから、僕たちは二人だけになってしまった。

大量の魚の缶詰が地下室に保管してあるが、三か月もすれば底を尽きるだろう

漁師だった父親の船と、おんぼろだけど頑丈なこの家。

それが僕らに残された全てだった。

僕らの小さな村から、港のある大きな町までは歩いて三時間かかる。

ワタルは親方の船の荷物運びをして、一日1000円の生活費と魚の骨やいらない部分を貰ってくる。

僕は、食料の増産の為に去年から作った家庭菜園の管理をする。

今は、ジャガイモと白菜を植えている。

種や肥料を買うお金が無いので、本当にささやかな代物だけど、どという訳か植物はよく育つ。

僕の家庭菜園に限らず、このあたりの畑はみんなそうで、いい土とおひさまに恵まれていると言える。

町の方に行くとも潮風の被害や土の状態が悪いので、種を植えても育たない。

そして、僕のもう一つの仕事は、家を守ることだ。

毎日、掃除と炊事をし、ときどき洗濯をする。戸締りや食糧の管理も立派な仕事だ。

父親の船は青いカバーに包まれて倉庫に眠っている。

修理しなければ乗れないくらいに老朽化していて、父親が前線に行っただけからには特に酷い。

「いつか、この船を直して、俺は漁師になりたい」  
夕食の時にワタルが言った。

「今は戦争中だけど、きつとなれるよ」

「親方は、駄目だっていうけど、俺はなる」

「そうだね」

最近、ワタルの身長が急に伸びて、腕や脚にも筋肉がついてきた。  
僕はチビのままだけど、足の速さだけは自信があった。

「キオトはそのままでもいいよ。俺みたいになったら嫌だ」

「二人で働いたらもっと楽ができるのに……」

「家を守るのがお前の仕事だろ？」

「うん」

「帰る家があるから、安心して漁ができるんだ」

「父さんがよく言ってたね」

「漁師の間では当然さ。親方も言ってる」

「ふーん」

「それより、気をつけるよ」

ワタルが突然、真剣そうな顔になる。

「何を？」

「お前は可愛いんだから、留守中に悪い男に引つかかるなよ」

「僕は母さんじゃないよ、男だし」

「そうだったな」

最近、ワタルは父さんの服を着ている事が多い。前の服はボロボロで窮屈になってしまったし、新しい服を買うお金はない。

だから僕は、母さんの服を着ている。

母さんが派手な服を着るようになったのは、あの詩人が家に居着くようになってからだだったから、僕は地味な服から順番に着ている。

「キオトはスカートがよく似合う。それに美人だ」

「からかわないでよ、ただでさえ村の人から変な眼で見られているのに、ワタルまで」

「でも、冗談抜きでさ……そんなに怒るなよ」

怒ってるんじゃないくて恥ずかしかったただけだけど、僕は怒ったふりを続けた。

「父さんが帰る家は、僕が守るよ、そうじゃないと本当に」

「前言撤回、お前はやっぱり男らしいよ」

「ありがとう」

ランプを節約するために、日が暮れてからは早めに寝る事になっている。

暖房のない部屋で、二人は寄り添って眠る。

小さかった頃から、ずっとそうしてきた。

だから、ワタルの体が成長する音を、僕はいつも感じている。

## 父さんの船

まだ、空が暗いうちに目が覚める。

アイツがまだ寝ているのを確認して、ゆっくりと毛布をかけてやる。

この時間には、父さんはもう家を出る準備をしていた。

船の置いてある倉庫で網を繕って、錆びないように針や金具には油を注していた。

一人用の船でオンボロだったけれど、立派な船外機がついていたし、借りたものではなくて、父さんが自分で買ったものだったから、すごく大事にしていた。

俺やキオトが船に乗ることを、絶対に許してくれなかった。

「こいつはオモチャじゃねえ、おれの命そのものだ」

そういつて、ぶん殴られた記憶がある。

船を見るために、俺はいったん家を出て、裏に回った。

倉庫に行くのは久しぶりだ。

俺もキオトも昔から船を見るのが好きだった。

模型の船を造って、近くの河で一緒に流したりもした。

俺は不器用だったから、一瞬で沈没する船ばかり造っていた。

キオトの造る船は完璧だった。形も美しかったし、性能も良かった。

村の子供の中では間違いなく一番早かったので、俺は勝手にキオトの造った船を盗んでは、近所のやつらに自慢していた。

倉庫に入ると、意外にも掃除が行き届いていて、塵一つ無かった。

それどころか、船は綺麗に洗っており、油まで注してあった。

「早いね、ワタル」

「おはよう、よく此処だつて分かったな」

「起きたらどこにも居ないから」

「油も注したのか？」

「うん、たまには手入れ、してやらないとね」

キオトが油まみれになって、船の掃除をする姿を俺は想像できなかった。

「あ、スカートは脱いでやったよ。汚れたら洗濯が大変だから」

「言ったら手伝ったのに」

「ワタルに任せたら、船の形が変わっちゃうよ。それに仕事で疲れているだろうし」

「なんだと」

キオトなりの気遣いなのだろうが、なんだか複雑な気分だった。

「ワタルが気持よく漁ができるように、頑張ったんだよ」

「そんなこと、俺が一人でやるのに」

「これは僕の仕事、でしょ？」

キオトが冗談で言っている訳ではないことは分かった。

「とにかく、勝手に船をいじるのはやめろ。怪我するぞ」

「嫌だ」

「え？」

「ワタルがなんと言おうと、僕がやるんだ。そうじゃないと漁には行かせない」

キオトが俺の意見にこんな風に逆らうことは、滅多にない。

「ワタルが一生、船の心配をしなくていいように、僕がやる」

「それじゃあ、俺が漁師として一生、半人前みたいじゃないか」

「違うよ、僕らは二人で一人前じゃない、二人前だよ」

「なんか、格好悪い」

キオトの言いたい事は解るけれど、俺はまだ納得できない。

「大丈夫、ワタルは格好いいから」

「そういう問題かよ」

なんだか、キオトの笑顔に誤魔化されている気もするが。

「それより朝ごはんが冷めちゃうよ」

「また、魚と豆のスープだろ」

「そのとおり」

「  
ま  
あ  
い  
い  
か  
」



## ある提案

父さんが帰ってこないことは、もうなんとなく分かっていた。けれど、それをワタルに言う気にはなれなかった。

町の人の話では、父さんは気がくるって海に落ちて死んだという。ワタルが近くの海で漁をするようになって、僕らは二人だけの生活に慣れていった。

最初はほとんど毎日、魚が獲れない日々が続いた。

缶詰も尽きていたので、豆と野菜の切れ端でスープにした。

体力が必要なワタルには、できるだけ栄養のあるものを食べさせたかったが、野菜はタダ同然で取引されるので、卵やミルクは高かった。

ある日、ワタルの留守中に、網元のトウジロウさんがやってきた。「お前たち兄弟は、よくやってるよ。最初は野たれ死ぬかと思ったが、ワタルは漁に出れるようになった」

「はい、おかげさまで」

「キオトもいい顔になった。俺が仕込んだんだからワタルはいい漁師になる」

「はい」

ワタルが褒められると自分の事のようにうれしく思う。

「だがな、二人で生活するには家計が厳しいんじゃないか」

「え？」

「今までは子供だったから、大目に見ていた分もある。今すぐには言わないが、きちんと組合に入って、払うものは払ってもらおう。トウジロウさんの表情はいつもと変わらなかったが、どうやら彼一人の意見というわけではないらしい。おそらく、網元として、こういう仕事もしなければならぬのだ。」

「わかりました、ワタルと相談して……」

「いや、この話には続きがあるんだ。二人で暮らすには厳しいと思

う。だが、それぞれ分かれて暮らしてみないか？」

「ワタルと僕が分かれて暮らすということですか」

「まあ、そういうことだ。ワタルは俺のところで働かせ、お前は別の家に預ける」

「そんな、僕たちはずっと二人で暮らしてきた。それにこの家だつて……」

「周りが支えてきたから、ここまでこれたんだ。違うか？」

「はい、そうです。でも……」

「親父さんは戻ってこない。これは確かな情報だ」

「もういいです。帰ってください」

トウジロウさんは、少しさびしそうな顔をした後、真剣な顔で言った。

「また来る。この話はワタルにはしない。お前はよく考えておけ」

「分かりました」

父さんの家を見捨てるなんてあり得ない。けれど二人では生活できない。

一番いい方法はなんだろう。

そんなことを考えていると、鐘の音で、ワタルが港に帰港したことが分かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9604f/>

---

フォーマルハウト

2010年10月10日16時38分発行